発達理論の学び舎

Back Number: Vol 48

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

941. 点としての私と地球

942. 研究に関する面白い発見事項

943. 仕事を通じた発達に対する関心

944. ベートーヴェンが曲に込めた法則性の探究に向けて

945. 流れのない流れの中で

946. 晴れた日曜日の朝に

947. 無限と永遠の世界につながる扉：死の直前のモーツァルトが描かれた絵画から

948. エマーソン、寺田寅彦、小林秀雄

949. 日曜日の論文執筆に向けて

950. ベートーヴェンのピアノソナタの発達研究に向けて

951. 難所の突破に向けて

952. 二転三転する研究論文

953. 作曲活動の始動に向けて

954. ヘンリー・デイヴィッド・ソローのように

955. 冬のような春のある一日

956. 第二弾の書籍の初校と内側の季節

957. 日記と個人の無限性

958. 七年前と今

959. マイナスの世界と明晰夢

960. 学び続けること・研究し続けることの幸せ

© YOHEI KATO 2018

941. 点としての私と地球

今日の夜から数日間は、天候が崩れるようである。そのため、午前中の仕事を途中で切り上げ、昼食前にランニングに出かけた。これはオーストリアから戻ってきて初めてのランニングだった。近くの河川沿いにあるサイクリングロードをランニングしている最中、私の頭の中はRというプログラミング言語で満たされていた。

というのも、午前中に試行錯誤しながらコードを書き続けていたからである。プログラミング言語を学習していくことによって面白いことが分かり始めている。その一つには、書かれたコードにも美しさがあるということである。プロのプログラマーであれば、書かれたコードの形を見て、その美しさと質が一瞬にわかるのだと思う。

自分が書いた稚拙なコードを見ながら、私ですらも、最近そのような美しさの違いがわかるようになってきた。午前中に書いているコードの中で、一つ不必要に長いコードがあった。それはさながら、自然言語で言えば冗長な言葉の繋がりのように映った。歯切れがなく、無駄に長い文章と同様に、私が書いたコードも不必要に長いものだと一瞬にしてわかった。冗長な言葉でも意味が通じる場合があるのと同様に、私が書いた長いコードもきちんと機能していた。しかし、そこに美が欠如していることは一目瞭然であった。

様々なコードを書きながら、一つの問題に直面していた。この問題はRに習熟した人であれば、とても簡単なものだろう。それは、今回の研究において、教師と学習者間のシンクロナイゼーションの度合いを分析するための手法である「交差再帰定量化解析（CRQA）」が出力する指標のうち、一つの指標が統計的に有意なのかどうかを、二つの時系列データを再標本化し、交差再帰定量化解析を1000回シミレーションした値を用いて検証するというものである。

Rに関しては、インターネット上で優れた情報が豊富に紹介されている。昨夜もインターネットを駆使してあれこれ調べていると、私の目的に合致するようなパッケージが存在していることに気づいた。しかし、その資料を読んでみると、内容が若干難解であり、特殊なパッケージを用いなくてもコードが書けるのではないかと思って、午前中にあれこれとコードを自分なりに書いていた。結局ランニングに出かけるまでにコードを完成させることができず、走りながらずっと適切なコードを考えていた。

すると幸運にも、うまく機能しそうなコードのイメージが脳裏に浮かび上がってきた。ランニングを終え、昼食後にそのイメージを基にしたコードを早速書いてみたいと思う。

昼食中に、ザルツブルグで何気なく考えていた旅の意義について思い返していた。私が南カリフォルニアのアーバインに住んでいた時、突如として、地球を離れて宇宙に出かけてみたいと思った記憶について以前に書き留めたいたように思う。ここのところ私は、自分という人間が一つの点であり、地球という惑星も一つの点のように思えて仕方ないのだ。同時に、それらの点は等しい重要性を持っているのだという考えが日増しに強くなる。

私という一つの点を重要な点だと確信するために、私は自分から一度離れる必要があった。それを可能にしてくれたのは、物理的に日本を離れるという行動だった。日本を物理的に離れて初めて、日本を対象化することが可能になり、日本に対して精神的に接近するということが起こった。そして、日本に対して接近することができただけではなく、私は自分自身に対しても近づけたのだと思う。

そこから、もし地球を物理的に離れたら同様のことが起こるのだろうか、と昼食を食べながら考えていた。これまで近づけなかったような地点にまで、自己接近することができるのだろうか。地球を物理的に離れることによって初めて、地球を対象化することが可能になり、地球に対して精神的に近づけることが起こるのであろうか。仮にそのようなことが起こるのであれば、点としての私と地球を、これまで以上にかけがえのない存在だと捉えることができるようになる気がしている。2017/4/14

942. 研究に関する面白い発見事項

今日は非常に仕事のはかどる一日であった。今日が土曜日であることを忘れてしまうほどに、仕事に熱中していたように思う。特に研究論文に関して、また少し進展があった。現在取り掛かっているのは、発話構造の複雑性の観点から教師と学習者間のシンクロナイゼーションを分析する箇所である。この箇所に関して、論文のストーリーとして面白いものが湧き上がり、それを具現化するにはどうしたら良いかをあれこれと考えていた。論文アドバイザーのサスキア・クネン教授との前回のミーティングでは、シンクロナイゼーションに関して執筆した文章を題材にディスカションをした。

教師と学習者間の発話行動に着目し、それに対してアトラクターを発見し、アトラクターが全五回のクラスを通じてどのように発達していったのかを記述した箇所に対して、クネン先生からも非常に面

白い発見事項であるというフィードバックをもらっていた。一方、前回提出した発見事項に関しては、「結局何が解明されたのかが不明確である」というフィードバックを受けていた。そのフィードバックについて改めて考えてみたときに、確かに発見事項が何であるのかが明瞭ではなく、そもそも発見事項に至るストーリーが面白みに欠けるという印象を自分自身でも持っていた。

そのため、今日はストーリーを再考し、そのストーリーに沿って分析が進められるのかどうかを検証していた。シンクロナイゼーションに関するストーリーは、まず最初に、全五回のクラスを通じて、教師と学習者間の発話構造におけるシンクロナイゼーションがどのようなプロセスを経ていたのかを視覚的に捉えることのできるグラフから始まる。このグラフを作成するために、プログラミング言語のRを活用した。グラフを見ると、教師と学習者間の発話構造の複雑性が合致している時もあればずれていることがある。

また、仮に合致している場合であっても、どのレベルの発話構造でマッチングが起こっているのかによって、シンクロナイゼーションのレベルが異なる。単純な例としては、教師が難解な概念や理論を難しいまま説明した場合には、学習者は基本的にその説明レベルについていくことができず、学習者のその後の発話構造のレベルは低いものになる傾向が強い。

しかし、そうした状況においても、時に学習者は高度な発話レベルに付いて行き、教師の発話構造と同じレベルで返答をする場合があるのだ。発話構造レベルのこうしたマッチングは、平易な概念や理論を教師が説明する際に生じるマッチングよりも稀であり、マッチングそのもののレベルも高いと言える。

Rの中にある“windwodrp”というパッケージを用いれば、こうしたマッチングのレベルの差異までも分析することができ、さらにはそのレベルの推移を時系列で捉えることができる。つまり、最初の分析で、シンクロナイゼーションの発達プロセスが変動性を伴ったものであることを示したい。その後、それではこの変動性はどのような種類のものなのかを「トレンド除去変動解析（DFA）」を用いて簡単に分析したいと思う。実際のところ、この分析をRを用いて先ほどすでに済ませ、結果は大変興味深いものとなった。

仮に、時系列データがランダムである場合、そのデータに対してDFAを適用すると、ホワイトノイズの変動性パターンを示す。一方、先ほどの分析からわかったのは、今回の研究におけるシンクロナイゼーションの発達プロセスは、ピンクノイズの変動性パターンを示していたのだ。

ピンクノイズの波形は、バッハの音楽や健康な心臓の鼓動などが発することが分かっており、今回のデータがそれらと同様の変動性の波を持っていたことを示した結果は興味深かった。今回の研究におけるシンクロナイゼーションの発達プロセスの全体としての構造が、ピンクノイズの変動性を持つことがわかったところで、今度はよりミクロな分析を行いたい。

具体的には、先ほどの全体のグラフを眺めると、各クラスのどのタイミングで最も高度な発話構造レベルでのシンクロナイゼーションが見られ、逆にどのようなタイミングでミスマッチが起こっているのかを分析していきたい。まずは、各クラスの中で、そうしたシンクロナイゼーションとミスマッチが起こっている箇所を特定する。その後、さらにミクロな観点から分析を行い、教師と学習者間の発話行動の観点から、そうしたシンクロナイゼーションとミスマッチが起こった要因について分析を行いたいと思う。要約すると、流れとしては、発話構造レベルの観点から全五回にわたるクラス全体のシンクロナイゼーションの度合いを可視化し、変動性のパターンを特定する。

その後、各クラスのシンクロナイゼーションとミスマッチが起こっている箇所を特定する。最後に、それらのシンクロナイゼーションとミスマッチがなぜ起こったのかについて、教師と学習者間の発話行動のパターンから分析を行うというストーリーにしたい。

明日の午前中と午後の時間を使って、このストーリーに関する論文箇所を執筆したいと思う。全体のストーリーの流れと分析の方法が明確なものになったため、勢いを持って論文を執筆することができそうだ。2017/4/14

943. 仕事を通じた発達に対する関心

昨日と同様に、今日も論文を執筆し続ける日になりそうだ。昨日の段階で、「創造性と組織のイノベーション」に関する協働論文の方には目処が立ち、今日の午後あたりに昨日書いた文章をもう一度読み返し、修正・加筆を行いたい。また、修士論文に関しては、昨日中に随分と試行錯誤をし、教師と学習者間の発話構造レベルにおけるシンクロナイゼーションについて全体像を描くことができた。

前回論文アドバイザーのサスキア・クネン教授に提出したものとは随分と様相を変え、シンクロナイゼーションに関しては大きな変更を加えたい。

当該箇所の執筆内容については、昨日日記に書き留めていたものに従いたい。今日の大きな仕事は、昨日頭に思い描き、日記に書き出した論文のストーリーに沿って言葉を生み出していくことだろう。すでにデータの解析結果は手元にあるため、今日はとにかく言葉を生み出しながら論文の形を完成に近づけていくことだ。それらの作業に目処が立てば、最終学期に履修する二つのコースで取り上げられている論文に目を通していきたい。

合計で50本に及ぶ論文をできるだけ早い時期に一読し、知識基盤を緩やかにでも良いので構築しておきたい。この作業が遅れると、クラスで取り上げられる知識項目を消化することができないままコースを終えることになりかねないので、早急に全ての論文に目を通しておく必要があるだろう。特に、創造性の測定に焦点を絞り、心理統計学の知識を獲得できる「タレントアセスメント」のコースには期待するものが大きい。このコースを履修することによって、おそらくこれまで私に欠けていた測定に関する観点を獲得することにつながり、心理統計学の概念や分析手法について新たなものを取得することになるだろう。

また、「成人発達とキャリアディベロップメント」というコースでは、産業組織心理学の観点から成人発達を捉えていくことになる。とりわけキャリアの発達に絡めて人間の発達を考えていくことは、これまでの私にはあまりなかった観点だ。しかし、ここ最近、人間が仕事を通じて発達していくという現象に強い関心を示している。今回履修するコースでは、企業組織で働くことを通じた発達現象を扱っていくことになると思うが、私の大きな関心は、偉大な芸術家や学者が自分の仕事を通じて内面の成熟を進行させていったということにあるような気がする。

それは、ウィーンやザルツブルグで自分の内側に深く接触した音楽家たちが仕事を通じて発達していった姿に私を打つものがあったことと関係しているだろう。よくよく考えてみると、私を感化してくれるような芸術家や学者に対して、私は彼らの仕事を活動の初期から晩年に至るまで全て順番に辿っていきたいという思いを常に思っていたことに気づく。

© YOHEI KATO 2018

創出された音楽、絵画、論文、書籍など、私に多大な影響を与えてくれる人物が産み出したものを、全て一つの総体として向き合いたいという思いが常にあるのだ。そこで私が行っていたのは、彼らの仕事を断片的に捉えるのではなく、部分を超えて全体として捉えることだった。それを通じて私は、彼らが残した作品の形式的かつ意味的な発達を見て取ることができるような気がしている。そして最も重要なことは、彼らが自分の仕事を通じて、どのようなプロセスで自らの内面世界を深めていったかを掴むことにあるだろう。

私がこれまで知らず知らず行っていたのは、まさにそうした、一人の人間が仕事を通じて発達していく姿を捉えていくことにあったのだと今になって気付かされる。同時に、彼らの軌跡を辿ることは、私が自分の仕事に励み、内面の成熟を深めていくことに対して大きな役割を担っていたのだと改めて気付かされる。

「成人発達とキャリアディベロップメント」のコースに期待することは、表面的な知識を獲得することではなく、人間が仕事を通じて発達していくという現象に対して、自分なりの考え方を深めていくきっかけを得ることにあると言えるだろう。「仕事を通じた発達」というのは、私の中で極めて重要なテーマとして浮かび上がっている。当該コースの開始が楽しみだ。2017/4/15

944. ベートーヴェンが曲に込めた法則性の探究に向けて

仕事を通じた発達というテーマが、私を強く捉えていることを感じる。早朝にそのテーマが自分の内側で浮上してきていることに光を当てると、不思議なほどにそのテーマが自発的に膨らんでいるのを実感している。そうした様子を見るにつけ、少しばかり、そのテーマに対して自分の言葉を当てる必要があるだろう。仕事を通じた発達と一口に述べても、「発達」が対象とする領域は極めて広い。

おそらく、日本で知られている発達理論だけに囚われていると、発達という概念が指す現象は、自己認識を含めた自我の発達だけに限定されてしまうかもしれない。しかしながら、私が想定している仕事を通じた発達とは、より多様な発達領域を含んだものである。自我の発達だけを意識の発達と捉えてしまうことは大きな問題だと思う。人間の発達とは、自我の発達だけではなく、多様な発達領域があるということをもう一度思い返す必要があるだろう。

そのようなことを思いながら、昨日考えていたことをふと思い出した。一般的に研究者は、自分の論文がジャーナルに掲載されるまで、研究アイデアを広く公開するようなことはない。実際には、信頼できる研究者の間だけでアイデアを公開することに留まるだろう。多くの研究者は、研究アイデアを公開するのを控える傾向にあるのかもしれないが、私はその点に関しては少し無頓着かもしれない。

実際にこれまで日記を通じて多くのアイデアを知らず知らず公開してきたことからも、研究が形になる前にアイデアを共有することにほとんど何らのためらいもないことがわかる。「創造性と組織のイノベーション」というコースの中で指摘されていたように、個人のアイデアというのは、どれも創造性に溢れるものでありながらガラクタでもある。

結局、何らかの分野に真に貢献するためには、そうしたアイデアを具現化させることが何より重要である。アイデアの創出から始まり、アイデアの実行に至って初めて、個人や組織の創造性は形のあるものとしてこの世界に顕現するのだ。そのようなことを考えてみたとき、アイデアを自分の内側で閉じておくというのはやはり馬鹿げたことのように私には思える。正直なところ、私が何らかの研究アイデアを書き留めて、それを見た他の研究者が自分よりも先に研究に着手してもいいと思うのだ。

研究の手柄や功績よりも、重要なことは、研究を通じて意味のある発見事項や面白い発見事項がこの世界にもたらされ、当該研究分野の進展に寄与するか否かにあるのだと思う。自分のアイデアを別の誰かが実行にまで移してくれたのであれば、逆にそれはこちらとしても有り難いことだと思う。

昨夜の段階でふと新たに研究してみたいと思ったテーマがある。それは、ウィーンの訪問を通じて、自分の深層部分に深く入り込んだベートーヴェンの発達に関するものだ。ベートーヴェンの内面世界の発達に直接踏み込むというよりも、今の私はベートーヴェンが残した音楽の外面的な発達に関心がある。特に、現在私が探究を深めている非線形ダイナミクスの手法を活用しながら、ベートーヴェンが残した曲にどのような法則性が潜んでいるのかを明らかにすることに関心があるのだ。

ベートーヴェンという偉大な作曲家は、おそらく相当意図的にかつ無意識的に、一つ一つの曲を自分なりのある法則性に基づいて生み出しているような気がしてならない。そうした法則性を単純に

掴んでいくのではなく、ベートーヴェンの作曲家としてのキャリアの発達プロセスと合わせて掴んでいく。

少しばかり調べてみると、ベートーヴェンが残したピアノソナタだけに絞ると、その曲数は32曲ほどである。最初にこの数字を目にした時、意外と少ない印象を私に与えた。だが、モーツァルトはピアノソナタを18曲、ショパンは3曲ほどしか残していないことを考えると、ベートーヴェンが残した32曲は、ピアノソナタに限って言えば多いと言えるのかもしれない。この研究は、私が大学院で行っている研究とは別で行いたいものであり、純粋に私の個人的な探究心に基づくものである。

32曲ほどであれば、全ての曲に対して何らかの定量化を施し、「再帰定量化解析（RQA）」や「トレンド除去変動解析（DFA）」という非線形ダイナミクスの手法を用いて、ベートーヴェンが曲の中に宿した法則性を掴むことが可能だと思う。ただし、私は音楽教育を受けたことはないので、どのように定量化すれば良いのかを専門家に相談しながら、その方法についてもう少し考える必要があるだろう。例えば単純に、音の高低の序列を表す音階に着目し、各楽曲の中に現れる音階を順番に数字に変換していく。

そうして一つの楽曲に対して一つの時系列データを作成することができれば、そうした時系列データを分析する手法はRQAやDFAのみならず無数に存在するため、自分が明らかにしたいことに合わせて手法を選択すればいい。例えば、音階の反復率や滞留率を明らかにするのであればRQAが有効だろうし、その楽曲がどのような変動性の種類を持っているのか──1/f揺らぎのようなピンクノイズを発しているのかなど──を調べるのであればDFAが最適だろう。

ベートーヴェンがキャリアの進展に合わせて、どのような法則性を曲に込めて行ったのかは、今の私にとって非常に気になるテーマである。それは、ベートーヴェンの内面世界の発達過程を明らかにする窓のように私には思え、同時にそれは自分の内面世界の発達過程を映す鏡のように思えるのだ。2017/4/15

【追記】

過去の偉大な作曲家が残した楽曲に対して、近い将来に本格的な分析を行うための準備を着実に進めていきたい。それはもちろん、純粋に学術的な興味関心に基づくが、それよりも切実なものと

して、そうした分析を通じて、自分の作曲技術のさらなる向上を実現させたいという思いが浮かんでいる。単純に知的好奇心を満たすためではなく、自分の作曲技術のさらなる涵養を目的とした研究に着手する日も近い。その日が今から待ち遠しく、その日を迎えるために今日の実践がある。研究アイデアについて絶えず考えを巡らせようと思う。フローニンゲン:2018/5/6(日)09:20

945. 流れのない流れの中で

書斎の中で静かに鳴り響く音楽が、意識の流れのように流れていく。窓の外に見える流れゆく雲が、意識の流れのように流れていく。流れゆく音楽や雲と同様に、私の内側の主観的な思考や感覚も絶えず流れる運動をやめようとはしない。心理学者のウィリアム・ジェイムズが指摘したように、私たちの内側には絶えずこうした流れが存在している。

時に私は、そうした流れを外から眺めるのではなく、流れの中に足をつけていることがある。端的に言えば、主観的な思考や感覚の流れそのものと一体化するような現象を時折体験するのだ。

日常の意識において、主観的な思考や感覚の流れを眺めると、それは非常に慌ただしく流れ去っていくもののように思える。私たちの意識の中には、動きを止めることのない思考やイメージ、そして感情が渦巻いているのだ。それらの流れを客観的に眺めるのではなく、そうした流れそのものと同一化してみると、面白いことに気づく。外側から眺めた慌ただしさが嘘のように、そこには静けさが広がっているのだ。

流れの表層は常に激しい動きを見せているが、流れの深層は常に静寂だ。私は、内側の思考や感覚が一連の流れを持っていることが、アンリ・ベルグソンが提唱する「持続」なのだと思い込んでいた。しかし、ベルグソンが真に伝えたかった持続感とは、主観的な思考や感情の表層の流れではなく、それらの深層にある「流れのない流れ」のことなのではないかと思ったのだ。ここのところ、無意識的に「静けさ」や「静寂」という言葉を日記で用いていることにふと気づいた。

思考や感覚というものは、確かに内側の流れなのだが、そうした流れを生み出す流れがあることを見逃してはならない。流れに同一化するというのは、表層的な流れと一体化することではなく、そうした流れを生み出している深層的な流れと結合することを意味する。そのようなことを考えていると、書斎の窓から見える景色が様相を変えた。

先ほどまで見えていた雲がどこかに消え去り、別の雲が窓枠から見える空を右から左に流れていくのが見える。雲が激しく流れ過ぎようが、静かに流れ過ぎようが、雲の向こう側にある空はいつも静かだ。そこには流れのない流れが常にある。

今から、数日間の食料を購入するために近くのスーパーに行き、帰宅後からは再び自分の仕事に着手したい。流れのない流れの中で、絶えず自分の仕事を進めたいと思う。2017/4/15

946. 晴れた日曜日の朝に

昨日は雨が断続的に降っていた。今日は昨日のような雨雲もなく、晴れた一日になりそうだ。早朝の爽快な空を眺めていると、今日は確実に晴れた一日になると確信していたのだが、天気予報を確認すると、午後から天気が崩れるらしい。正直なところ、それが信じられないほどに、今この瞬間の空は美しい。

フローニンゲン大学での最初の学期に受講した心理統計学のクラスを通じて、人間の直感がいかに頼りないものであるかを示す論文をいくつか読んだ。私は人間の直観が持つ力を信じているのだが、それを全面的に信じるのは問題があることを学んだ。人間の直観力は、与えられた情報や既存の情報を組み合わせて一つの全体的な判断を下す際に、重要な変数を発見することには長けているが、それらを組み合わせることには実は向いていない、ということを学んだように思う。

人間に備わる直観力を活用しながら今目の前に広がる空を見ても、そこに雨を発生させるような変数など見つけることができない。私は一体どの変数を見逃しているのだろうか。天気を予測する際に、人間の直観力は本当に頼りないものだということをまざまざと見せつけられた気がした。

人間の直観力、ひいてはプロフェッショナルと呼ばれる人たちの判断が、実は定量的アプローチによって導き出された判断に劣るという実証結果と出会ったのは、ロブ・メイヤー教授とスーザン・ニーセン先生のクラスであった。来週から始まる最後の学期において、再び二人が担当する「タレントアセスメント」というコースを履修する。こちらのコースでは、心理統計学に関する概念と理論、そして実際のデータ分析手法について学びを深めたい。

実は、スーザン・ニーセン先生は博士課程に在籍している研究者であり、私の修士論文の査読者の一人でもある。以前、私の研究の中で適用した統計手法に関して助言を求めた際に、非常に親切に対応をしてくれ、いくつかの参考になる論文を合わせて紹介してくれたことがある。

このコースについても、彼女から詳しい説明を事前に聞き、大変興味のある内容だったので今回履修することに決めた。前回の学期に引き続き、今回の学期に履修するコースの課題は、筆記試験のみならず、コンサルティングの要素が絡んだ論文の提出を要求している。その課題の内容は、ルーワーデンという町にある観光に特化したプロフェッショナルスクールが、アドミッションの際に志願者をより適切にアセスメントするにはどうすればいいのか、というものである。

詳細は課題に取り組みながら書き留めておきたいが、要するにこの課題は、タレントアセスメントの先行研究や概念・理論を踏まえ、このスクールがこれまで行ってきた志願者選抜方法の問題点を指摘し、改善案を提案するというものだ。

私自身、これまで発達測定を企業の人財評価に導入するプロジェクトに従事してきたため、そうした経験を活かしながらこの課題に取り組み、さらに新たな観点を獲得できるだろうという期待がある。この課題は、とりわけ私の関心を引くものであるため、そのスクールのアドミッション担当がゲストスピーカーとしてやってくる第一回目のクラスが楽しみである。

一方、最後の学期に履修するもう一つのクラス「成人発達とキャリアディベロップメント」でも、コンサルティングの要素が含む課題が要求されている。「タレントアセスメント」のコンサルティング課題は一人で取り組むことが要求されているのだが、「成人発達とキャリアディベロップメント」の方のコンサルティング課題はグループで取り組むことが要求されている。こちらの課題は、企業人としての能力の発達、働くモチベーションの変化、キャリアフェーズに応じた問題など、何か一つの観点に絞り、そのテーマに対してグループメンバーの一人一人が関係当事者にインタビューをし、問題の発見から問題の解決案を先行研究や既存の理論に基づいて行っていくというものである。

私は、三人や四人でのグループ課題をあまり好まないのだが、この間の学期で二つのグループワークをこなしてきた経験から、グループ課題もそれほど悪いものではないという考えを持ち始めている。今回の課題は、発達心理学と産業組織心理学を架橋するようなテーマであり、個人的にもキャリア

の発達は非常に関心のあるトピックだ。こちらのコースも今から非常に楽しみにしている。2017/4/16

947. 無限と永遠の世界につながる扉：死の直前のモーツァルトが描かれた絵画から

昨日は、論文を大幅に加筆・修正するという作業を午後から夜にかけてずっと行っていたためか、昨夜の睡眠時間はいつもより一時間ほど長くなった。昨夜も十時前に就寝したのだが、今朝目覚めたのは七時であった。目覚めた瞬間に、十分寝たにもかかわらず、もう少し睡眠を取ってもいいのではないかと思われるような薄い衣のようなものが全身を包んでいた。全身を取り巻くそうした衣を引き剥がしてくれたのは、朝一番に聴いていたモーツァルトの交響曲だった。

この曲を聴きながら身体を動かし、体が完全に目覚めたところで書斎の椅子に腰掛けた。すると、ザルツブルグのモーツァルト博物館を訪れた際の記憶が蘇ってきた。モーツァルトが生誕したその場所で、私は一枚の絵画作品と出会った。この博物館は、実際にモーツァルトが生まれた場所であり、天井や床は当時のままなのだそうだ。

博物館の三階だっただろうか、そこで私は壁にかけられた一枚の絵に釘付けになっていた。その絵に描かれていたのは、モーツァルトがこの世を去った瞬間の様子であった。そこでは、モーツァルトがベッドの上に横たわり、彼の家族や関係者が悲嘆にくれている姿が描かれていた。この絵はまちがいなく、悲痛さで満ち溢れたものなのだが、私はその絵の中に別の物を見出していた。

私が見ていたのは、モーツァルトの死という結果ではなく、死の前後で永続している何かだった。その絵画の中で、モーツァルトが死の直前まで『レクイエム』を書き続けていたことに、私は静かに感動していた。

死の直前まで何かに打ち込み続けた人物に私はいつも大きな励ましを受ける。モーツァルトが死の直前まで取り組んでいた『レクイエム』は完成を待たず、結局未完のままに終わった。多くの人は未完のままに終わった作品の完成を望み、未完であることを嘆くかもしれない。だが、私はそれとは違った感覚を持っている。

完成のピリオドが打たれない未完の作品の終わりには、永遠への扉が開かれているように感じるのだ。完成されなかった『レクイエム』の作品が永遠の世界に開かれたものであるというだけではなく、それよりもむしろ、死の直前まで自分の仕事に打ち込み続けたという行為を通じて、モーツァルトの音楽そのものが無限と永遠に満ちた世界に開かれていったような感覚を私に引き起こす。

モーツァルトの生家のある部屋に掲げられたその絵画を眺めている間中、私はそのような感覚の中にいた。自分の仕事が完成することなく、死から呼びかけがあったとしても、何ら問題はないのだと私は思った。重要なのは、死の直前まで自分の仕事に捧げることのできる意志である。その意志こそが、無限と永遠だけが存在する世界につながる扉を開くのだ、ということを確信した。

私も最後の最後まで、自分の仕事に取り組み続けたいと強く思う。人間に宿命づけられた死という現象を私たちが乗り越え、いや真に受け止めることの鍵は、そうした意志の中にあるのではないだろうか。

早朝の晴天とは打って変わり、日記を書き留めている最中に不気味な雲が現れ、突如として雨が降り出した。しかし、日記を書き終える直前に雨が止み、不気味な雲は私の視界から消え去っていた。

そして、遠くの空に虹がかかっているのがかすかに見えた。その虹は、全てを捧げて何かに打ち込み続けた最後の瞬間に残る、無限と永遠の世界につながる扉を開くための透徹した意志を象徴しているように私には思えた。2017/4/16

948. エマーソン、寺田寅彦、小林秀雄

私が敬意を払っている友人の一人が、小林秀雄の作品を集中的に愛読していたことを聞いてからしばらくの時間が経つ。昨日、別の知人の方とお話をさせていただいた際にも、その方が小林秀雄から多大な影響を受けていたということを聞いた。

これまで私は小林秀雄の作品を真剣に読んだことはないのだが、彼はどこか私の頭の片隅に常にいるような存在であった。実際に、次回日本に一時帰国した際に購入したいと思っていた和書のリストの中に、『小林秀雄全集第八巻モオツァルト』を入れていたことをふと思い出した。

小林秀雄の評論内容というよりも、文体を通して感じ取られる彼の存在を確かめてみたいという思いが少しずつ大きくなっている。その知人の方との昨日の話の中で、物理学者かつ文筆家でもあった寺田寅彦について言及があった。

小林秀雄と同様に、私の中で、寺田寅彦という人物も以前から気になっていた存在であった。生粋の物理学者でありながらも、研究や日々の生活で得られた何気ない体験を交えながら、随筆として科学の世界を多くの人々に開いた功績を知り、彼の文章に対しても非常に大きな関心が芽生えた。

日々の生活の中で、科学論文という形式に沿って文章を書くことに喜びを見出しながらも、同時にここ最近、日記や随筆という文章形式にも固有の価値を見出していた私の関心と合致するものがある。随筆という形式によって表される世界とその価値について考えていると、そういえば、ラルフ・ワルド・エマーソンという米国を代表する思想家も随筆形式の文章を多く残していたことに気づいた。

実はエマーソンについても、彼の思想が気になって仕方ない時期があった。一人の人間が内在的に持つ無限性を信条とし、超越主義的哲学を打ち立てたエマーソンの名前を最初に知ったのは、米国の思想家ケン・ウィルバーの書籍を読んだ時であった。その時は、エマーソンがどのような思想を持っていたのかを深く知ろうとすることもなく、それから数年が経った。二年前に一年間ほど東京に滞在していた時に、きっかけは忘れてしまったのだが、エマーソンの著作を読む必要があると思い立ち、彼の全集を文献リストに加えた。

随筆という形式について少しばかり考えを巡らせていた時に、再びエマーソンの名前が私の内側で浮かび上がり、時期が来たと思った。私は、即座に英国のアマゾンを通じて、エマーソンの全集を購入した。

一人の思想家と真剣に向き合いたいと思う時、私はその思想家の仕事を断片的に追うのではなく、全集を通じてその人物の仕事を辿りたいと常に思っている。先ほど購入したエマーソンの全集も800ページを超える大著だが、エマーソンの思想が今の自分にとって無くてはならないものだということを考えると、大著であろうとなかろうとそうしたことはほとんど関係ない。

エマーソン、寺田寅彦、小林秀雄にせよ、彼らが自分の内側の世界を絶えず言葉として表現し続けたからなのか、彼らの存在には私を惹きつけてやまないものがある。そして彼らの文章を読むにふさわしい適切な時期というものが、私の中であるようなのだ。エマーソンの文章は、今の私が読むべきものなのだと強く思う。2017/4/16

949. 日曜日の論文執筆に向けて

今日は午前中に、「成人発達とキャリアディベロップメント」のコースで取り上げられている論文を読み進めていた。思っていた以上に論文を読み進めることができ、今日の午前中の短い時間の間に、初回から第二回のクラスで取り上げられる論文全てに目を通すことができた。

日本のように高度高齢化社会を迎える国の場合、これらの論文で取り上げられているテーマというのは非常に重要なものだと思った。私自身、自分の寿命が尽き果てるその瞬間まで自分の仕事を進めたいと思っているためか、定年退職という構成概念に対して常に疑問の目を向けている。加齢と仕事、そして人間発達というテーマは、これからの私の中で常に重要なものとして存在し続けるだろう。

昨日と同様に、今日の夕方から夜にかけて、論文の執筆を進めておきたいと思う。現在研究を進めている成人のオンライン学習に関して、教師と学習者の発話行動を分析する「状態空間グリッド（SSG）」に関する章はすでに書き上げることができている。しかし、研究が二転三転した様子に対しては、思わず笑みをこぼしてしまう。

以前論文アドバイザーのサスキア・クネン先生に、今回の研究において非線形ダイナミクスの手法は「交差再帰定量化解析（CRQA）」だけを用いることにする、と説明しておきながらも、教師と学習者の発話構造レベルに関する非線形時系列データに対して、「トレンド除去変動解析（DFA）」も適用することにした。

これは論文の構想を練っている初期の段階に考えていたことでもあり、なおかつ、論文の提案書にも明記していたことでもある。つまり、私は今回の研究において三つの分析手法を活用しながら、オンライン学習を通じた成人の発達過程を捉えようとしていたのだ。

論文を執筆してからしばらくすると、それら三つの手法を用いることによって、ストーリーの一貫性を保つことが難しく、さらには規定の分量を大幅に超えてしまう恐れがあった。だが、ここ数日間あれこれと研究について考えていると、やはりDFAを用いるべきだという結論に至った。そうしたこともあり、無駄な文章を削ぎ落としながら、なおかつ三つの手法を用いた際の論文のストーリーをもう一度練り直した。頭に思い浮かんだ全体像を紙に書き出し、実際に文章を少しずつ組み立てていくと、三つの分析手法を用いながらも、一つのまとまったストーリーを展開できることに気づいた。

昨日は、CRQAとDFAに関する“introduction”のセクションを書き直し、これから“Method”と“Results”のセクションを一気に書き進めたいと思う。とりわけ興味深い分析結果が得られたため、その喜びによって自分を見失わないように、冷静に“Results”セクションを書き進めたいと思う。それらの執筆が終われば、本当に山場を越えたことになるだろう。2017/4/16

950. ベートーヴェンのピアノソナタの発達研究に向けて

昨日は久しぶりに夜更かしをしてしまった。一年目のプログラムが終了した後に、ベートーヴェンのピアノソナタに関する構造分析を非線形ダイナミクスやダイナミックシステムアプローチの手法を用いながら行ってみたいという思いが一気に吹き上げたからである。

一つの楽曲というのは、開始から終わりにかけて「発達」していく。おそらく「発展」という言葉の方がふさわしいのかもしれない。しかし、私はあえて「発達」という言葉を用いたい。両者の言葉はともに、英語では“development”と表現されるのだが、私が発達心理学を専門としていることに多分に影響を受け、一つの曲は発展していくというよりも発達していくという方が自分の内側の感覚に忠実な気がしている。

というのも、一つの楽曲は、発展という言葉が示唆するような勢いの増加や量的な拡張が単純に起こっているわけではなく、人間の発達過程と同様に、質的な差異を常に内包しながら、浮き沈みを伴う形で曲の最後に向かって運動を続けていく、と考えているからである。端的に述べると、一つの楽曲には、絶えず構造的な差異が存在しており、それは曲の進行に合わせて時に上昇し、時に停滞や下降を伴う生物の発達過程と瓜二つであるように私には思える。そこでは、単純に勢いが増加しているわけでもなく、また、単純に何かが栄えていくわけでもない。

そのため、「発展」という言葉が持つ語感よりも、質的な差異の浮き沈みを伴う「発達」という言葉が持つ語感の方がふさわしいように思える。さらには、より大きな観点で見ると、ベートーヴェンが書き残したピアノソナタの全作品が、あたかも人間の発達と同様に、質的な差異の変遷を伴う多様な発達過程を持っているように思えて仕方ないのだ。ピアノソナタ全作品を一つの全体を持つ生き物と捉えた場合、それは勢いが増しているわけでも、何かが盛んになっているわけでもない。しかし、そこには成熟への歩みがあるのだ。

ベートーヴェンが最初に生み出したピアノソナタから、最後に残したピアノソナタに向かって、様々な紆余曲折を経ながら、質的に深いものに変容していく姿が見られるのではないだろうか。ウィーンで訪れたベートーヴェン記念館の印象が私の中で強烈に残っており、ベートーヴェンという存在が私の内側に流れ込んでくるような体験をして以降、ベートーヴェンが私の頭から離れることはない。

そのため、一年目のプログラムが終了する六月半ばあたりから、ベートーヴェンが残した作品の中にある秘密を探究してみたいという思いが吹き上げてきたのだ。偶然にも昨日、上の階に住むピアニストの知人と話す機会があり、ベートーヴェンのピアノソナタに関する専門書を何冊か借りた。同時に、仮にピアノソナタを非線形ダイナミクスやダイナミックシステムアプローチの手法を用いて分析する際の、楽曲の定量化についてヒントを得た。最初の研究は、ピアノソナタ第1番に絞り、主に定量的な分析から導き出された定性的な発見事項を明らかにしていくものになるだろう。

この研究を出発点として、ベートーヴェンの活動区分や作風区分と重ねる形で、音楽家としてのベートーヴェンの内面の成熟過程とピアノソナタ全体の発達過程を探究してみたいと思う。自宅に戻り、それらのことをあれこれ考えながら、借りた書籍を読みふけっていると、いつの間にやら深夜になっていた。睡眠時間がいつもより随分と少ないのだが、今朝の目覚めは爽快以外の何物でもなかった。2017/4/17

951. 難所の突破に向けて

昨日、研究論文を執筆している最中、ザルツブルグで先日行われた非線形ダイナミクスの国際会議でお会いしたハーマン・ハーケン教授の顔が突然浮かび上がってきた。複雑性科学の発達に多

大な貢献を果たしたシナジェティクスを提唱した人物の一人であるハーケン教授とその場で交わしたやり取りが強く記憶に残っている。

学会に参加している最中に、ハーケン先生の書籍を読みたいと思っていた。これまで、ハーケン先生の仕事の功績と名前だけを聞いたことがあっただけであり、先生が書き残した書籍については一切読んだことはなかった。ザルツブルグでの宿泊先のホテルで、先生の書籍の中で強く自分の関心を引くものを何冊が選んでいた。そのことを昨日ふと思い出し、早速英国のアマゾンを通じて、“Information and Self-Organization: A Macroscopic Approach to Complex Systems (2006)”を購入した。

昨日は、ラルフ・ワルド・エマーソンの全集も購入したことを考えると、二人の人物の書籍内容そのものは全く異なるものでありながらも、何か大きなつながりがそれらの間に横たわっている気がした。それらの書籍に共通する普遍的なものが私を引き寄せたのは間違いないだろう。しかし、その共通事項が何なのかを未だ掴めていないため、それが何かを見出すように二つの書籍を読まなければならない。両者に共通して存在している普遍性が私を捉え、それが私の内側の成熟をさらに展開させていくに違いないという予感がしている。

それらの書籍を読む際に、決して二つの書籍の細部に囚われることなく、私がそれらの書籍を必要だと思わせた本質を発見するように努めなければならない。一年目のプログラムが終了する六月の半ばまで、それらの書籍をじっくりと読む時間は取れないかもしれないが、焦ることなく二つの書籍を読み進めていきたいと思う。

今日は午前中から、修士論文の執筆に取り掛かりたい。昨日思わぬところで足踏みをし、その一箇所に長らく頭を悩ませていた。結局、昨日の段階でそれが解決することはなかった。その箇所さえ解決すれば、あとは論文の全ての箇所が一つのまとまりとして流れ出すことがわかっている。その流れをせき止めるその一点を何とか突破できるように努めたい。

プログラミング言語のRと格闘し、分析結果が示す指標の意味を明瞭なものにしていく必要がある。今日はとにかくこの点だけに焦点を当てていきたい。2017/4/17

952. 二転三転する研究論文

今日は、午前中から修士論文の執筆に取り組んでいた。昨日に引き続き、今日の午前中も相当試行錯誤を強いられていた。教師と学習者間の発話レベルにおけるシンクロナイゼーションを分析するために、「交差再帰定量化解析（CRQA）」を適用していたのだが、その分析結果の解釈が難航していた。

本来であれば、CRQAを用いることによって、教師の発話レベルが学習者の発話レベルを先導しているのか後追いしているのかという度合いや、教師と学習者の発話レベルがどれほどシンクロナイゼーションを起こしているのかなどを分析することができる。しかしながら、結局私がこの手法に関する原理を適切に把握しておらず、同時に、この手法に関する深い知識を持っていないがゆえに、当該箇所の文章の構造にぐらつきが見られ、さらには、その内容に深さが欠如していたのが見て取れた。

なんとか複数の論文と専門書を往復しながら、論文の執筆に必要な知識を構築していこうとしていたのだが、知識体系というものはそんなに早急に獲得されるものではない。午前中から夕方にかけてもがき続けていたのだが、最終的には打つ手が見つからなかった。

やはりCRQAについては、根本原理を自分の中で咀嚼し、結局この手法が何をどのように明らかにするものなのかに関する理解をじっくりと深めていく必要があると思った。非常に残念だが、CRQAは今後の発達研究で活用しようと思う。

CRQAに関する私の知識体系が不十分とはいえ、これまでかなりの時間をかけて論文や専門書を読み進めてきたのは確かである。また、プログラミング言語のRを活用しながら専用のコードも試行錯誤しながら書いていた。今回の研究でCRQAを活用することがなかったとしても、これまでの過程で身につけた知識やプログラミングスキルは今後の研究で必ず役に立つだろう。さらには、これまでCRQAに関して執筆し続けていた論文の文章も、今後の研究論文の中に組み込んでいくことができると信じている。

このように自分を合理化しながら、私はCRQAを今回の研究で適用することを諦めた。修士論文を書き上げた直後から着手する予定の論文には必ずCRQAを活用したい。

結局どのように論文の残りの箇所を執筆していくかというと、教師と学習者の発話レベルについても「状態空間グリッド（SSG）」を活用することにした。この手法は、教師と学習者の発話行動に対してすでに適用していたものだ。教師と学習者の発話行動上の相互作用を一つのシステムと見なし、この手法を通じて、システムの挙動の柔軟性やアトラクター状態などを分析していた。

当初は、発話行動上の観点からSSGを活用し、発話レベルについては、CRQAや「トレンド除去変動解析（DFA）」を活用する予定だった。しかし、本日の方向転換を受けて、SSGという一つの分析手法に絞り、発話レベルについてもSSGを活用することにした。こうすることによって、教師と学習者間の発話行動というシステムの挙動とアトラクター状態と、発話レベルというシステムが持つそれらとを比較することが可能になる。

分析手法をSSG一つに絞ることによって、“Method”について新たに文章を書き足す必要はなく、“Results”のセクションも、発話行動の文章に従いながら分析結果を記述していけば良い。それを持ってようやく最後の“Discussion”セクションの執筆に至ることができる。

これまで論文アドバイザーのサスキア・クネン教授に論文の進捗状況を確認していただく際に、締め切りに追われることは一度もなかった。だが、今回は少しばかりこれまでと事情が異なっている。何とか明日中に、“Discussion”セクションまで書き終え、明後日の夜にクネン先生に論文のドラフトを送りたい。2017/4/17

953. 作曲活動の始動に向けて

このようなことを今の時期に悠長に言ってられないのだが、作曲の勉強を本格的に開始しようと思う。実は、以前にも自分で音楽を生み出したいという思いが湧き上がってきたことが何度かあった。その時に、MOOCを通じて、米国の音楽大学院が提供する作曲に関する講座を受講していた。しかしながら、結局その講座を最後までやり通すことなく、作曲の勉強は中断されていた。

だが、ザルツブルグを訪問したことをきっかけに、作曲への思いが再燃した。決して作曲の専門家になろうと言うのではない。内側の思念や感覚を、自然言語を通じて表現するだけではなく、音楽という言語で表現したいという抑えがたい衝動をなんとかしたいのだ。これに似た衝動をこれまで何

度か経験していたのだが、その度ごとに、自分には作曲など到底無理であろうという考えによってその衝動を抑圧してきた。

上記の作曲に関する講座を受講した際も、その衝動を抑えることを無意識的に行っていたのだと思う。しかし、ザルツブルグの訪問をきっかけに、その衝動がもはや抑えることのできないほどにまで膨らんでいることに気づかされた。

日々の生活を通じて湧き上がる自分の思念や感覚を、言葉として日記に書き留めておくだけではもはや不十分なのだ。以前から、自分の筆不精を嘆き、なぜ自分が日記や論文を含め、毎日より多くの文章を書かないのか、あるいは、書けないのかについて自己批判を続けていた。その理由が今になってわかったような気がするのだ。結局、自分の深層心理に湧き上がるイメージや感覚の流れを自然言語の言葉にすることには限界があり、その代替手法として作曲という表現方法があるのだということに気づいたのだ。

当然ながら、言葉にならないイメージや感覚と向き合い、言葉の形でこの世界に顕現させていくことを怠りたくはない。だが、言葉の形からこぼれ落ちしてしまうものすらも、私は何とかしてこの世界に形として表したいのだ。そのために作曲の勉強を再開させたい。実質的には勉強をするという要素よりも、自分で曲を作っていく実践を絶えず行いたい。

作曲理論に精通することが私の目的ではなく、内側のイメージや感覚を音として形に残していくことが第一に掲げている目的だ。また、作る曲に関してもピアノ曲だけに焦点を絞りたいと思う。それは、ピアノが奏でる音に強い愛着があるからだ。結局、作曲活動も人間発達に関する自分の探究の一部なのだと思う。私がどのように作曲を学び、どのような曲を生み出し、作曲の技術と作品の内容がどのように深まっていくのかを自分で見届けたいのだ。

作曲に関しては完全に素人であり、現段階では音符もまともに読めないが、とにかく短い曲でも良いので毎日少しずつ形にしていきたいと思う。以前受講登録をしていたMOOCの講座をもう一度最初から学び直したいと思う。とにかく実際に曲を作り、曲を作りながら作曲に関する知識と技術を学んでいきたいと思う。自分の内側でうごめくイメージや感覚には少し待ってもらい、それらを音楽という普遍言語を通して、何とか形として外側の世界に誕生させたいと強く願う。2017/4/17

954. ヘンリー・デイヴィッド・ソローのように

昨日も怒涛のような流れの中で過ぎ去った一日であった。午前中から夜にかけて修士論文の執筆を行い、そこから就寝前に向けて、「創造性と組織のイノベーション」のコースで要求されている協働論文を執筆していた。こちらの協働論文の提出期限は、今日の午後であるため、再度今朝に全体のレビューを行っておきたい。

論文を書き続ける日が相変わらず継続しているが、明後日までに現在取り組んでいる三つの論文のうち、二つは完全に完成し、修士論文についても完成の目処が立つ。今週の週末ぐらいは、研究と直接関係しないような読書をゆっくりと行いたいと思う。文章を書き続ける日々を過ごしながら、作曲活動も並行させていきたい。

内側の感情や感覚を言葉という形式だけを持ってして形にするのではなく、音楽という形式で形にしていくという試みは、今の私にとって無くてはならないものになりつつあるのを実感している。表現を待つ内側の現象が、メロディーとして絶えず動いているのがわかるのだ。可能であれば、メロディーから曲を創造していくというアプローチを採用したい。作曲に関する最低限の知識を学ぶことも、今週末から開始したいと思う。

確かに現在は、時に外発的な動機から論文を読むことや文章を書くことを行うことを迫られることがある。これは、何かしらの教育機関の枠組みの中で探究活動を営もうとする場合に避けては通れないものだと思う。しかし、受講しているコースで課せられるような論文であっても、それを自分の内発的な動機に従って読み、課題で要求されている論文を内発的な動機から執筆していくことを忘れたくはない。内側から湧き上がる純粋な動機と一体化するとき、諸々の活動が怒涛の流れの中で過ぎ去っていくように思えても、内側は常に静かな流れの中で進行していくはずだ。

昨夜の雨が止み、今朝は再び晴れ間の見える穏やかな朝である。今の私は、ヘンリー・デイヴィッド・ソローのような生活を送っている。米国を代表する思想家かつ詩人でもあったソローは、ある時からマサチューセッツ州の郊外にある森の中で自給自足の生活を始めた。19世紀半ばから機械化や資本主義が進行し、社会の流れが慌ただしくなり始めた当時、ソローはいち早く、慌ただしい時間の流れの中で生かされている私たちの人生に批判と検証の目を向けた。

ソローは、外側の流れに翻弄されることを避け、内側の流れを大切にする人間であった。ソローは森の中に丸太小屋を建て、そこで自給自足の生活を送る中で随筆を書き続けた。それに近い生活を今の私も送っているような気がしてならない。

外側の怒涛の流れに翻弄されてはならない。内側の怒涛の流れと一体化する形で日々の生活を営んでいくのである。内側の流れを発見し、それに逆らうことなくその流れの中で生きる時、静寂な感覚にきっと包まれるはずである。そうした人生を歩み続けることを忘れないようにしたいと思わせる朝であった。2017/4/18

955. 冬のような春のある一日

今朝はなんと、四月の中旬にもかかわらず、最低気温がマイナスであった。いよいよ最終学期が始まり、今日は朝の九時から、「成人発達とキャリアディベロップメント」のコースに参加してきた。

この二週間は大学に行く用事も特になかったため、今日は久しぶりにキャンパスに足を運んだ。マフラーと手袋は欠かせなかったが、自宅を出発した時には、幾分気温も上がっており、静かな早朝の中を歩くことは実にすがすがしかった。

道中、ノーダープラントソン公園を通った時、一時期は春の様相を呈していた公園の雰囲気も、再び冬の終わりに逆戻りしたかのように思えた。私の目には、公園内の動植物が、少し困惑しているように見えた。彼らの困惑を払拭するような、本当の春が早くやってくることを望む。

本日参加した、「成人発達とキャリアディベロップメント」のクラスは初回であるがゆえに、このコースを通じて学習した内容について何かを書き留めておくのは今後になるだろう。ただし、今日のクラスで印象に残っていることだけを簡単に書き留めておきたい。クラスの最初に、担当講師のアニータ教授が、ちょうどミシガン大学ビジネススクールからフローニンゲン大学に移ってきたばかりであるという話をしていた。

彼女は、スイスのベルン大学でPhDを取得し、その後、ミシガン大学で経験を積んだ後に、フローニンゲン大学にやってきたそうだ。歳は私よりも幾分上ぐらいであるから、教授としては若手なのだと思う。

彼女の専門であるキャリア発達理論は、職業を核にした発達理論であるがゆえに、私がこれまで学習してきた発達理論とは幾分毛色が異なる。そのため、これからのクラスを通じて、「仕事」を中心に据えたキャリア発達理論を学べることは大きな楽しみである。そうした気持ちの表れか、クラスの最前列で今日の初回のクラスに参加している自分がいた。このコースではグループワークが課せられており、前回の学期と同様に、3〜4人で協働して論文を執筆する必要がある。

私はグループワークをそれほど好まず、自分の書きたいテーマについて課題論文を執筆したいという思いがあるのだが、そうした気持ちを抑えて、今回もグループワークを通じてしか得られないことをできるだけ得られるようにしたいと思う。

今日は夕方から就寝前に向けて、再び修士論文の執筆に取り掛かりたい。一昨日、昨日と共に、論文のある箇所に関してかなり苦戦を強いられていたが、昨日に閃いた案を採用することにしたので、もはや迷いなく文章を執筆していくことができるだろう。

書斎の窓から外に目をやると、木々が夕方の太陽光に照らされながら風に揺られていた。外で静かに流れる風のように、論文の文章を流れるように執筆していきたい。こちらの論文の完成もあともう少しだ。2017/4/18

956. 第二弾の書籍の初校と内側の季節

昨日、第二弾の書籍の初校を編集者の方から送っていただいた。初校を見ると、中身の構成やデザインがとても綺麗に仕上がっており、充実感と共に、編集者の方に対して多大な感謝の念を持った。

これはあくまでも初校なので、ここからまた修正・加筆をしていく必要があるだろう。初校を見る限りでは、何かを新たに付け加えていく必要はほとんどなさそうであり、文言の統一や誤字脱字の確認を行うことが主な作業になるだろう。

私が作った原稿が、編集者の方の力を借りることによって、視覚的にも内容的にも読みやすいものになったということに対して改めて驚いた。また、タイトルについても、当初私が頑なにこだわっていたものよりも、昨日編集者の方から送っていただいたタイトル案の方が優れていることが直感的にわ

かった。送っていただいたタイトル案は、本書の中で私が伝えようとしていたことに合致するものであり、私が考えていたタイトルよりも重厚的な響きがある。とてもシンプルなタイトルでありながらも、それ以外にふさわしいタイトルは今のところ見当たらない。

多くの人に手に取っていただくという意味でも、そして、本書の内容を的確に表現しているという意味でも、そのタイトルが最もふさわしいものに思えた。このタイトルで本書を世に送り出せたら幸いだ。今週末は、初校の修正に時間を充てたいと思う。

四月も最終週になろうというのに、今朝も最低気温はマイナスであった。暖房を入れ、早朝の仕事に取り掛かることにした。気温の低さとは裏腹に、日の出と日の入りの時間は春を通り越して夏の様相を呈している。六時前には太陽が昇り、夜の九時頃に太陽が沈むようになっている。

この日記を書いている今この瞬間も、すでに太陽が昇っており、薄い黄色の太陽光が辺り全体を照らしている。第二弾の書籍を春に間に合うように出版したいと思っていたが、それは日本の春ではなくて、オランダの春を意味していたようだ。

本書が日本で世に送り出される頃、日本は初夏に入り、オランダはようやく春に入るのだろう。春に間に合うように本書を完成させると意気込んでいた当時の私は、オランダの春を意図していたのだろうか。結果として、日本が初夏に入る頃に本書が世に送り出されることになったことには、何らかの意味があるに違いない。

日本が初夏を迎える頃、私の内側には日本の初夏が等しく存在するだろう。そして、日本が初夏を迎えたとしても、私は日本の春を感じることができるだろう。なぜなら、私の内側には常に日本の四季が存在しているからだ。2017/4/19

957. 日記と個人の無限性

昨日、「成人発達とキャリアディベロップメント」という産業組織心理学のクラスに参加するためにキャンパスに向かって歩いていると、ふと自分が毎日書き残している日記の量に考えが及んだ。歩きながら計算してみると、一日に平均して四千字ほどの日記を書き残していることがわかった。単純な計算だと、一ヶ月あたりに書籍一冊ほどの日記を書き留めていることになる。

三年間オランダで生活する間、この習慣を継続していくと、書籍40冊弱に及ぶ四百万字を越す日記を書き残すことになるかもしれない。だが、それでも分量としては全く足りないというのが正直なところだ。全くもって書き足りないのである。

早朝の静けさの中で、キャンパスに向かう一歩一歩の歩みに呼応するかのように、私の内側でそのような思いが徐々に膨れあがっていった。どうやらまだ、私の内側には、言葉をせき止めるような安全弁が備わっているようなのだ。確かに、その安全弁が外れてしまったら、本当に日記を書くだけで一日が終わってしまうかもしれない。それぐらいに、今の私の内側には、言葉の形を待つものたちが無数に存在しているのだ。

無限の空間の中にある内側の思考や感覚が、外側の世界に誕生することを今か今かと待っているようなのだ。私が日記という形式のみならず、作曲という形式で内側の現象を外側に表現していこうと思ったことは、それと大きな関係があるだろう。

安全弁は安全弁として内側に存在し続けたとしても、その種類と質そのものが変容することを望む。日記にせよ作曲にせよ、それらの表現活動こそが安全弁なのではないかとふと思った。内側の世界と外側の世界を架橋するものは、私の言葉であり音なのかもしれない。そうであれば、安全弁を外すというのは間違った行為であり、やはり安全弁の種類と質を変容させていく必要があるのだろう。

内側の無限の空間の中で外側に誕生しようとすることを望むものに対して、安全弁を外すのではなく、言葉と音という安全弁を通して外側に送り届ける必要があるのだ。今の私が持っている安全弁は、言葉をせき止めているというよりも、それそのものが言葉である以上、せき止められていたものはやはり内側の思考や感覚だったのだ。また、安全弁そのものを変容させるというのは、私自身の言葉を変容させていくことに他ならない。絶えず言葉を練磨し、彫琢し続けるという課題に私はこれからも向き合い続けていく必要があるだろう。

絶えず内側の現象に形を与えたいのであれば、自らの言葉を鍛錬するしか方法はない。言葉を鍛錬する道は、やはり自分の言葉を書き続けるという実践の中に存在するのだと思う。私の言葉が変容し、安全弁が変容するまで自分の言葉を書き続けていく必要があるだろう。そして、こうした営み

© YOHEI KATO 2018

は一生涯にわたって続くのだと覚悟している。その覚悟は否定的なものではなく、非常に肯定的なものである。ラルフ・ワルド・エマーソンが述べた「個人の無限性」に気づくというのは、そうした覚悟を伴うものなのかもしれない。

私の内側に、空間のない空間が無限に広がっているだけではなく、そこには外側の世界に生まれ出て光を浴びることを望んでいる無限の現象が存在するのだ。この気づきは、私という一人の人間の無限性と密接に関係しているように思えて仕方ない。

日記を書けば書くほど、個人の無限性に気づき、それが本当に無限で始まりも終わりもないものだということに気づく。始まりも終わりもないものに言葉を与え続けることは、荒唐無稽に思われるかもしれないが、それをしないでは済まされない性質が、人間には内在的に備わっているのではないだろうか。2017/4/19

【追記】

内側にある無限なものを具現化させる試みだけに従事する生活を実現させること。それは必ず実現される。なぜなら、実現させる必然性が自分の内側にあるからだ。一人の人間が真に人間として生きることの可能性を探求することが自分に課せられている使命であるならば、その使命を全うするための生活を送る。創造活動だけ。創造活動だけに従事する日々を必ず実現させようと思う。フローニンゲン:2018/5/6(日)10:18

958. 七年前と今

早朝に日記を二つほど書き留めた後に、朝食の果物を食べた。ソファに腰掛けながら、ぼんやりと壁にかかった絵画を眺めていると、先ほどの日記が自分に強く作用しているのを感じた。

何かが書き足りなかったのか、それとも新たなものが内側から湧き上がってきたのか、再び日記に書き留めておきたいことがあった。それは、米国の思想家ラルフ・ワルド・エマーソンが残した「個人の無限性」と私が人間の発達に関心を持ったそもそものきっかけとの関係性についてである。

振り返ってみると、私が現在の関心領域を探究し始めたのは、今から七年前になる。当時は、経営コンサルティングファームで働いていたため、本格的な探究を始めたのは、退職後の渡米以降とな

る。ただし、七年前の段階で、私は人間の能力の発達可能性について、極めて強い興味を持っていた。その興味を刺激したのは、トランスパーソナル心理学という学問領域であった。

この学問領域は、直接的ではないにせよ、私が現在探究している知性発達科学とも関係している。トランスパーソナル心理学に興味を持った当時の私は、人間の能力はどれほどまでに開拓可能なのだろうか、という素朴なテーマに対して強い関心があった。その後しばらくその関心テーマを探究し、その延長線上に構造的発達心理学があることに気づいた。構造的発達心理学の中に存在する無数の段階モデルにおいて、その高次元の領域は、常にトランスパーソナル心理学の領域であると言っても過言ではない。

米国に渡ってからの私は、様々な発達理論を学び、特にそれらの段階モデルで主張される高次元の発達現象に対して、今から思うと奇妙なほどに取り憑かれていた。ある意味、当時の私は、高次元の発達現象の探究に帰依していたかのようである。高次元の発達現象に私が帰依し、それらの現象が私を憑依するという関係性は長く続いた。しかしながら、ある時からその関係性が途絶えた。

そのきっかけは定かではない。とにかく、人間の発達が無限になし得るものだという盲目的な発想から脱却したのは、その時であった。

確かに、人間の能力の成長には終わりがなく、発達の可能性は無限に残されている。だが、それらの事柄が直ちに人間の無限の発達を意味しないことを私は知ってしまったのだ。

人間の発達とは非常に不可解だ。トランスパーソナル心理学や構造的発達心理学が提唱する高次元の発達現象だけに目を奪われていると、人間は無限に成長するものだという安易な発想に絡め取られてしまう。

説明が非常に難しいのだが、人間の発達は、無限に成し遂げられる可能性を持った有限なものなのだ、と私は理解するようになった。トランスパーソナル心理学や構造的発達心理学に熱を上げていた時の私は、人間の発達の限界とそれが不可避にもつ有限性について盲目だったように思う。当時の私は、人間の能力の発達が持つ無限性だけに着目をしており、一方、今の私は、無限性を強調するというよりも、有限性の方を尊重しているのだ。こうした考え方の変遷を辿って、今の私がいるように思う。

© YOHEI KATO 2018

米国の思想家であるラルフ・ワルド・エマーソンに対して、最近の私が絵も言わぬ関心を示していることを書き留めていたように思う。彼の信条であった、「個人の無限性」というのは、決して能力の無限の成長を意味するのではない。

人間の内側には、無限なものが別に存在するのだ。内的世界そのものが無限に、そして永続的に存在し続けるのであり、その世界の内側の現象は無限に発達するような様相を私たちに提示するが、それが個人の無限性を指すのではない。発達するしないに関わらず、内的世界の存在そのものが個人の無限性を表すのである。それらを混同していたのが以前の私であった。

私は一生涯をかけて、人間の発達現象を探究することになるのだろうが、見ているのはもはや無限の成長や発達などではない。そのようなものから脱却して、個人の永続性と無限性という観点から、有限な人間の発達を見つめていくのだ。

朝食の果物、壁に飾られた絵画作品は、そのような洞察を私にもたらしてくれた。早朝に書き留めていた日記で書き足りなかったことが、今ようやく完全に形となって姿を現したようだった。

無限な世界の中で、絶えず有限な世界を捉えたい。今日という一日が、無限の世界の中で有限な輝きを放つことができるように、今日という日を過ごしたい。2017/4/19

959. マイナスの世界と明晰夢

依然としてして寒さが残るフローニンゲンの日々の中でも、今朝は特に寒さを感じた。気温を確認すると、その瞬間の外気は零度であり、最低気温はマイナス二度であった。四月も終わりに差し掛かろうというのに、フローニンゲンでは、最適気温がマイナスになることがあるのだと知った。今朝の寒さは、フローニンゲンの冬の時期を思い出させた。

外の気温がマイナスの時には、世界が不思議な空気に包まれているように感じていたことを思い出した。マイナスの世界には、凜とした固有の静けさがあり、同時に身も心も引き締まるような空気が流れている。今この瞬間も確かに寒さが残っているのだが、冬の寒さとは質的にやはり異なる。あの凜とした静けさと全てのものを凝縮させるような冬の時代が幾分懐かしい。

昨日は、髪を切ってもらいにかかりつけの美容師のところに行った。いつもお世話に成っている美容師のロダニムと、昨日も様々な雑談をしていた。ロダニム曰く、昨年は四月のこの時期に雪が降ったそうだ。ロダニムの視点はいつも私に新たな気づきを与えてくれるのだが、昨日も、春が到来したと勘違いをしてしまった動植物に関する話をロダニムが持ち出した。

確かに、数週間前の暖かさであれば、春がやってきたと動植物たちが勘違いをしてしまうのも無理はない。しかし、寒さが逆戻りすることによって、誕生しかかっていた春の花々や新たに誕生した生物たちが死滅してしまったことをロダニムが指摘していた。自然は時に残酷である。

帰宅後、書斎の窓から見える木々を確認したところ、これまで少しずつ咲いていた白い花々の姿が見えなかった。つぼみに戻ったのか、あるいはこのところ断続的に降っていた雨によって散ってしまったのだろうか。その様子に対して、少し残念に思いながらも、再びこの木々に白い花々が咲き誇る日を私は信じていた。

今日は、午前中から論文の執筆に取り掛かり、昼食までに目安の箇所まで執筆を進めることができた。昼食後に少しばかり仮眠をとると、久しぶりに明晰夢を見た。

木で作られた小さな道が海の上に浮かんでおり、それは地平線の彼方に向かって伸びていた。私は、ただゆっくりとその道の上を歩き、海岸から遥か先の地平線に向かっていた。

これは明晰夢であったから、私は自覚的にその道を歩いていたと言える。しばらく自覚的にその道を歩いていると、昼寝の終了を告げる音楽が流れ出した。

昼寝を済ませると、午前中から昼食後にかけて執筆していた論文の内容が、自分の頭の中でさらに整理されているのがわかった。不純なものが削ぎ落とされ、そこまでの思考内容が一つの束に凝縮されたような感覚があった。その感覚を持ちながら、午後から夜にかけて論文の残りを執筆していきたい。2017/4/19

960. 学び続けること・研究し続けることの幸せ

ついに修士論文がほぼ完成した。提出期限まで残り二ヶ月ほどあり、この段階でほぼ全ての項目を完成させることができて嬉しく思う。思えば、ここまで辿り着くのに非常に多くの紆余曲折があった。それは第二弾の書籍の執筆以上であったと言ってもいいかもしれない。

米国の大学院に留学していた時を含め、私にとって修士論文を書くのは今回が二回目であったが、一つの学術論文を執筆するというのは苦労が伴いながらも、実に多くのことを学ばせてくれるものだと改めて思う。

今回の論文を完成させるために、一体どれほどの論文や専門書を読んだだろうか。もはやそれらの数を数えるのが馬鹿らしいほどに、数多くの文献に目を通していたように思う。そうした文献を読む中で、様々なことを考えては文章に落とし込み、あるいは実際に手を動かしながらプログラミングコードを書いたり、コンピュターシミレーションを行ったりした。それらの試みのうち、実際の論文に盛り込まれることになったのは微々たるものである。大多数は論文の中に組み込まれることなく、私の研究ノートの中だけに留まっているか、もしくは文章にする前段階でボツになっている。これが研究の実際の姿なのだと思う。

私は今回の研究を通じて、ダイナミックシステムアプローチや非線形性ダイナミクスの諸々の手法を深く学んだだけではなく、再度カート・フィッシャーのダイナミックスキル理論を学び直したように思う。

500個近い発話データに対して、フィッシャーのダイナミックスキル理論を適用して定量化するというのは、かなり大掛かりな試みであった。実際のデータに対してダイナミックスキル理論を適用することによって、発話構造の分析に関する新たな観点が獲得され、分析のスキルがさらに向上したように思える。

その他にも挙げれば切りがないのだが、やはり学術研究を通じて、人間発達に関する自分の知識や、発達現象を分析する手法に関するスキルが飛躍的に向上したのは間違いないようである。これが研究という実践を通じた、研究者としての私の成長なのだろう。

自分の書籍を世に送り出すのと同様に、一つの論文を誕生させるには産みの苦しみが伴う。しかしながら、そうした苦しみなど一切感じさせない喜びが、今回の研究過程の中に絶えず存在していた。一つの書籍を書き終えた瞬間に、また次の書籍を執筆したくなるのと同じように、今回の論文がひと段落した瞬間に、また次の論文を執筆したくなった。もう創造に関する欲求を抑える必要も我慢する必要もないのである。

できることなら、創造欲求の中に自分の全てを投げ入れたい。実際には、もはや私は創造欲求の中に溶け出していると言っていいかもしれない。その証拠に、もう次の研究について取り掛かり始めているからだ。次の研究は、MOOCを活用した成人学習を探究するものであり、さらにはベートーヴェンのピアノソナタの非線形的発達過程を探究するものである。

前者については、フローニンゲン大学のMOOCを統括する教授に研究のアイデアを持ちかけ、後者についても研究アイデアの醸成と参考文献の調査を開始した。両者の研究を通じて、私は何を学ぶのだろうか。研究者として、そして一人の人間としてどのような発達を経験するのだろうか。そして、それらの研究の後に、どのような新しい研究が待っているのだろうか。

それらに対する期待が膨らむ一方で、そうした期待以上に、学び続けることと研究し続けることの中で毎日を過ごせることが何より幸せだ。2017/4/19